

限定合理的な人間像から見たバイアス盲点に関する一考察

山田優樹^a

要約

「バイアス盲点」とは、他者と比較して、自分自身がバイアスの影響を受けにくいと考える傾向である。本研究においてはバイアス盲点が日本においても確認されるか、及びバイアス盲点の影響の強さとナッジの賛否の関係について、検証する。本稿では限定合理的な人間を仮定する行動経済学の側面から、一般人を対象とした調査を行い、バイアス盲点を再考する。また、ナッジの普及にはナッジの賛同者を増やす必要があり、バイアス盲点とナッジの賛否の関係性について調査する事で、ナッジの更なる浸透に寄与したい。実験の結果、日本においてバイアス盲点の傾向を示すことが確認された。また、バイアス盲点とナッジの賛否の関係について、負の相関を示す結果が得られた。したがって、ナッジの更なる浸透には、バイアス盲点の影響が強い人に向けて、ナッジが限定合理人の有するバイアスを活用し「より良い社会」の形成に貢献する点について理解を求めめる必要がある。

JEL 分類番号： C90, D91

キーワード：バイアス盲点, ナッジ, 認知バイアス, ヒューリスティック

^a 明治大学情報コミュニケーション学部 eh200245@meiji.ac.jp

1. イントロダクション

世間では「バイアスを知れば、知った後の行動が改善される」ことが想定されている。しかし、バイアス盲点(bias blind spot)の研究を鑑みると、この想定には疑問が残る。まず、バイアス盲点とは、他者と比較して、自分自身がバイアスの影響を受けにくいと考える傾向である。本研究ではバイアス盲点の代表的な研究である Pronin et al. (2002)を参考に、回答者がバイアスの説明文を読んだ後に、各バイアスについて「この傾向や効果が、平均的な日本人に、どの程度の影響を与えていると思いますか。」という他者バイアス評価と「この傾向や効果が、あなた自身に、どの程度の影響を与えていると思いますか。」という自己バイアス評価を出題して、バイアス盲点を測定した。

本稿においてバイアス盲点は、各認知バイアス・ヒューリスティックについて、各バイアスの説明文を読んだ後に、他者バイアス評価と比較して、相対的に自己バイアス評価を低く算出することと定義する。バイアス盲点の影響が強い人々は、他者がバイアスを受けやすいと考え、バイアスを他人事として認識し、バイアスを知った後の行動が改善されにくいと推定される。本稿では日本において、バイアス盲点の結果が再現されるか検証したい。さらに、バイアス盲点の影響の強さとナッジの賛否の関係性について調査し、ナッジの更なる浸透に貢献したい。バイアス盲点の影響が強い人は、他者と比較してバイアスの影響を受けずに良い意思決定できると考えたと推定される。セイラー・サンスティーン(2022)によれば、ナッジの必要性を理解せずパターンリズムを認めない人の主張として、他の誰かがするであろう選択よりもよい選択ができることはまちがいないとする考え方がある。パターンリズムを認めない人とバイアス盲点の影響が強い人は、類似した考え方をする。したがって、バイアス盲点の影響の強い人々は、ナッジに反対する傾向があると推測した。

2. 先行研究と仮説

バイアス盲点について、日本の大学生を対象に計測した研究として Kambara(2017)がある。さらに、Scopelliti et al. (2015)を参考に、バイアス盲点スコアを分析に用い、各バイアスの他者バイアス評価から自己バイアス評価の相対差を加算した結果を平均して算出した。バイアス盲点スコアが高い人は、バイアス盲点の影響が強いことを示す。バイアス盲点の社会的意義について考えると、神原(2022)は物理的知覚において、自分の知覚経験が外界のそのまま反映であると信じるのが人の生存に重要な適応機能であるという。他方、Pronin(2007)は自己の認識が「客観的現実」を直接反映していると思い込むことをバイアス盲点の原因として挙げ、他者との対立を深刻化させる恐れに言及している。

本稿では2つの仮説を検証する。仮説1は「日本で一般人を対象に調査すると、バイアス盲点の傾向が確認される。」である。バイアス盲点については、先行研究の結果が再現され

ると推定した。仮説2は「バイアス盲点スコアが高い人々は、ナッジに反対する。」である。

3. 調査方法

2023年8月7日17時より、Yahoo!クラウドソーシングを利用し、回答者を交互にA・B群に振り分けるランダム化比較試験を実施した。回答者数はA群が420名、B群が411名であり、不正回答の抽出を目的とした設問に正解したA群339人(有効回答率80.7%)、B群353人(同85.9%)を分析の対象とした¹。A群は認知バイアス測定後にバイアス盲点の測定を行ったが、B群はバイアス盲点の計測後に認知バイアス測定を行った。その後は両群共通の設問であり、ナッジの賛否の程度を測定するナッジ賛成度得点の設問、及び性別などを尋ねる設問を設けた。したがって、A・B群で生じた結果の差は、認知バイアス測定とバイアス盲点測定について、設問の順番が異なったことに起因すると推定される。

認知バイアス測定では、ウェイソン選択課題(確証バイアス)など、バイアス盲点で計測する各バイアスに応じて5つの設問を用意した。バイアス盲点の測定では、他者バイアス評価・自己バイアス評価を計測し、9を「強くそう思う」、1を「全くそう思わない」の9件法とした。バイアス盲点の説明文は、Pronin et al. (2002)を参考に効果や傾向などの中立的な用語を用いて作成した²。ナッジ賛成度得点は、ナッジの賛否を尋ねた先行研究の設問を参照し³、賛成を4点、反対を1点とする4件法を用い、40点満点で計測した。

4. 分析結果

A群のバイアス盲点スコアの平均値は0.48、B群は0.51であった。また、表1において、両群の5要素のバイアスを対象に、他者バイアス評価と自己バイアス評価の結果について対応のあるt検定を行うと、両群の5要素のバイアスにおいて有意水準1%で統計的に有意な差があった。さらに、代表性ヒューリスティックを除き、各バイアスで小さな効果量が認められた⁴。両群で効果量が最も大きかったのは確証バイアスであり、B群で中ぐらいの効果量であった。したがって、これらの結果は、仮説1である「日本で一般人を対象に調査すると、バイアス盲点の傾向が確認される。」を支持する。

¹ バイアス盲点測定の項目中に用意し、設問文は「この傾向や効果が、平均的なアメリカ人に、どの程度、影響を与えていると思いますか。この問題は、ご自身の考えに関わらず、『2』を選択(回答)して下さい。」である。

² フレーミング効果・基準率の無視の説明文はWest et al. (2012)を参考に、確証バイアスはScopelliti et al. (2015)を参考にした。また、利用可能性ヒューリスティック・代表性ヒューリスティックについて、セイラー・サンステーション (2022)を参考にした。

³ サンステーション、ライシュ(2020)が用いた15項目の質問から、主にナッジの基準を満たさない(程度が軽い項目を含む)と言及された項目を除外し、10項目を尋ねた。

⁴ 効果量は帰無仮説が正しくない程度を量的に示す値でありcohen's *d*を用いた。

仮説2は、効果量が低かった2つのヒューリスティックを除いた「3要素のバイアス盲点スコア」を用いた。表2よりA群はバイアス盲点スコアとナッジ賛成度得点の関係が見出せなかった。他方、B群はバイアス盲点スコアが1増加すると、ナッジ賛成度得点が0.71減少することが示され、仮説2である「バイアス盲点スコアが高い人々は、ナッジに反対する。」を支持する結果となった。また、ナッジ賛成度得点を目的変数、「3要素のバイアス盲点スコア」と「認知バイアス測定において、各設問に正解したか示すダミー変数」を説明変数として、ステップワイズ法を用い重回帰分析した。その結果、表3より3要素のバイアス盲点スコアとウェyson選択課題に正解できたか示すウェysonダミーで説明するモデルが採択され、小さな効果量を示した。つまり、3要素のバイアス盲点スコアが高い人、及びウェyson選択課題に正解した人は、ナッジに反対する傾向があった。

表1 A・B群のバイアス盲点

A群	他者バイアス評価		自己バイアス評価		t	p	d
	mean	sd	mean	sd			
フレーミング効果	6.33	1.46	5.85	1.52	6.66	<.0001	0.318
確認バイアス	5.91	1.54	5.18	1.61	9.68	<.0001	0.463
基準率の無視	6.08	1.52	5.45	1.56	8.37	<.0001	0.408
利用可能性ヒューリスティック	6.00	1.44	5.68	1.55	5.38	<.0001	0.215
代表性ヒューリスティック	5.97	1.57	5.71	1.56	3.92	<.001	0.170
B群	他者バイアス評価		自己バイアス評価		t	p	d
	mean	sd	mean	sd			
フレーミング効果	6.50	1.32	5.89	1.48	9.46	<.0001	0.439
確認バイアス	6.08	1.43	5.32	1.56	10.01	<.0001	0.508
基準率の無視	6.12	1.42	5.55	1.59	6.78	<.0001	0.376
利用可能性ヒューリスティック	6.00	1.46	5.69	1.60	4.42	<.0001	0.200
代表性ヒューリスティック	6.07	1.55	5.76	1.62	4.50	<.0001	0.195

表2 A・B群の単回帰分析

Predictors	A群			B群		
	Estimates	CI	p	Estimates	CI	p
(Intercept)	26.28	25.63 - 26.92	<0.001	26.45	25.79 - 27.10	<0.001
3要素のバイアス盲点スコア	0.16	-0.37 - 0.69	0.557	-0.71	-1.22 - -0.21	0.005
R ² /R ² adjusted	0.001 / -0.002			0.022 / 0.019		

表3 B群の重回帰分析

Predictors	Estimates	CI	p
(Intercept)	26.58	25.93 - 27.23	<0.001
3要素のバイアス盲点スコア	-0.69	-1.19 - -0.20	0.006
ウェイソンドামী	-5.20	-8.59 - -1.81	0.003
R^2 / R^2 adjusted	0.047 / 0.041		

5. 結論

5.1. 考察

本研究は日本の一般人を対象としてバイアス盲点の傾向が改めて確認され、ヒューリスティックのバイアス盲点を計測した点で新奇性がある。物理的知覚を信ずる意思決定、すなわちシステム1による迅速な意思決定は進化的合理性がある一方、バイアス盲点の影響による弊害が想定される。それ故、システム1・システム2の双方の利点を生かすには、システム1を抑制するクリティカル・シンキングが有効である。認知バイアスへの対処法として友野(2016)は、システム1で判断・決定する時にありがちな間違いをよく知ってシステム2で対処する、すなわちクリティカル・シンキングを用いる必要性に言及する。したがって、限定合理人がバイアスに対処するには、クリティカル・シンキングを涵養する必要がある。

バイアス盲点スコアの高い人は、自身がバイアスに引っかかりにくいという認識であり、ナッジの導入に反対する傾向がある。同様に、認知バイアスに引っかかりにくい人は、反対する傾向が示唆された。しかし、自分自身がバイアスに引っかからないことは、ナッジの導入に反対する根拠とはならない。大竹(2022)によれば、伝統的な経済学で想定されていた合理的な意思決定からのズレをバイアスと呼び、ズレを逆に利用し、よりよいものに変えようするのが「ナッジ」と呼ばれるという。それ故、ナッジは限定合理人が有するバイアスを活用し、より良い社会へ導く点に意義がある。したがって、ナッジの更なる浸透には、バイアス盲点の影響が強い人に向けて、ナッジの意義について理解を求める必要がある。

バイアス盲点の影響はB群で強く、2つのヒューリスティックを除く3要素のバイアス盲点スコアを算出すると、A群は0.611、B群は0.648である⁵。A群は認知バイアス測定後に、バイアス盲点の測定を行った。認知バイアスの設問を解く過程は、バイアスについてクリティカル・シンキングする過程に類似している。A群においてバイアス盲点スコアとナッジ賛成度得点の関係が見出せなかった原因として、クリティカル・シンキングを先に実施したことで、バイアス盲点の測定の際にキャリーオーバー効果が発生した可能性がある。

⁵ 3要素のバイアスの効果量を合計すると、A群は1.189、B群は1.323であった。

5.2. 本研究の課題

まず、不良回答の抽出を工夫したデータ収集が必要である。両群で有効回答率の割合が変化し、母比率の差の検定において連続性の補正をしない場合、5%水準で統計的に有意な差が生じた。不良回答を抽出する設問の位置が、両群で異なっていたことが影響したとみられる。また、バイアス盲点を尋ねる際に、回答者に示す説明文の再考が必須である。効果量が大きかった確証バイアスは、効果量が小さかった代表性ヒューリスティックと比較して、説明文が分かりやすかった可能性がある。説明文の具体性と長さのバランスを取るため、バイアス盲点測定に関する調査紙設計の精緻化が求められる。さらに、バイアス盲点スコアの高い人がバイアスに引っかからないという自意識を有している点に留意し、バイアス盲点スコアが高い人に向けて、ナッジの賛同者を増やすアプローチの検討が必要である。

引用文献

- Kambara, A., 2017. Effects of experiencing visual illusions and susceptibility to biases in one's social judgments. *SAGE Open* 7, 1-6.
- 神原歩, 2022. 自己の客観性を過信する傾向についての一考察. *Japanese Psychological Review* 65, 431-442.
- 大竹文雄, 2022. 行動経済学の処方箋 働き方から日常生活の悩みまで. 中央公論新社, 東京.
- Pronin, E., Lin, D. Y., and Ross, L., 2002. The bias blind spot: Perceptions of bias in self versus others. *Personality and Social Psychology Bulletin* 28, 369-381.
- Pronin, E., 2007. Perception and misperception of bias in human judgment. *Trends in Cognitive Sciences* 11, 37-43.
- Scopelliti, I., Morewedge, C. K., McCormick, E., Min, H. L., Lebrecht, S., and Kassam, K. S., 2015. Bias blind spot: Structure, Measurement, and Consequences. *Management Science* 61, 2468-2486.
- キャス・サンスティーン, ルチア・ライシュ, 2020. データで見る行動経済学 全世界大規模調査で見えてきた「ナッジ(NUDGES)の真実」. 日経 BP, 東京.
- リチャード・セイラー, キャス・サンスティーン, 2022. NUDGE 実践 行動経済学 完全版. 日経 BP, 東京.
- 友野典男, 2016. 感情と勘定の経済学. 潮出版社, 東京.
- West, R. F., Meserve, R. J., and Stanovich, K. E., 2012. Cognitive sophistication does not attenuate the bias blind spot. *Journal of Personality and Social Psychology* 103, 506-519.